

巻頭言

中央大学附属中学校・高等学校

学校長 木川裕一郎

(中央大学法学部教授)

この一年、世界的な新型コロナウイルスの拡大により、多くの人命が奪われ、世界経済に大きな混乱と不安を生じた。「教育・研究」第34号が発刊されるこの日も、危機的な状況はまさに継続中であって、人類は、感染拡大の終息に向けた道筋を模索し続けている。そのなか、我々は既存の価値観と社会構造の変革が強いていることを素直に受け止めつつも、現時点で、社会の将来像や人間生活の未来について正答を示せていない。次世代を切り拓く人材の育成は、現在の中央大学附属中学校・高等学校で最も重点的に取り組まれている目標の一つであるが、こういった大きな社会変革を強いる事象を前にして感じるのは、教育研究の重要性である。

社会的な変革が求められる中で、マスコミでは、傷つけられた社会に対する対処療法が盛んに議論される一方で、極めて根源的・原理的な観点から、アフターコロナにおける人間の生活や社会を支える哲学や基本的な思考に関する提言も数多く報道されている。どの局面でも求められるのは変化であるが、我々が長い時間をかけて築き上げた既存のシステムや信念の修正廃棄が非常に困難であることを考えると、未曾有の社会的危機を前にしてこそ、教育に対する期待は一段と大きくならざるを得ないであろう。社会の抜本的な転換を求められる中で、将来的にわたり安定的で持続性ある社会を構築するためには、そのような社会状況の変化を所与の前提とした価値観の確立や柔軟性ある社会の構築が必要であり、大変革の経験をした今の若者こそ、その主体として期待されていかなるべきだからである。

本号に寄せられた多くの論文や研究は、長く若者たちの思考や行動を指導者として注視し、分析してきた教員による未来に向けての提言に他ならない。まさに教育経験者だからこそ発信できる貴重な教育的な提言や指摘は、現在または近未来の若者に対する価値ある道標ではあるが、同時に、その若者が築き上げる未来を先取りする行為を意味する。現に、いずれの論稿も、それぞれの論者が振り返っていかび上がる生徒たちとの多くの時間やその記憶を想起させる要素を多く含んでいる。そして、将来に向けて教育がどのように変わっていくべきか、また、変わっていくかを見なければならぬかを真剣に論じる筆者たちは、私にとって、まだ見ぬ社会の未来像に見え隠れする不安を撥ね退け、未来に光を見出す勇氣を与えてくれる。

その意味で、本号に寄稿してくださった先生方には、感謝申し上げます。また、編集の作業を取り纏めてくださった笹部晃子教諭には心から御礼を申し上げます。